

平成 26 年度 高浜市「防災ネットきずこう会」事業報告書

【目的】「自助」「共助」「公助」を基本とした防災・減災対策を進めることを目標に、以下のポイントを重点として体系的に学習していく。

1. 東日本大震災の現地へ訪問し、ボランティア活動の体験などから防災・減災対策の認識を深める。
2. モデル地区で、地域・学校・企業等が協働した「避難所開設訓練」を実践する。
3. それぞれの団体が主体的に関わること。

【対象】市域全体（5 小学校区）およびその内のモデル地区（吉浜地区）

【事業概要】

月日	内容	講師等
6 月 7 日（土） 14:00～16:30	キックオフ講演会（市域全体） 「避難所の課題と東日本大震災の現状」 ワークショップ 「避難所運営ゲーム HUG の体験」	RSY 栗田および WS ファシリテーター5 名程度 （市が手配）
6 月 30 日（月） 19:00～20:30	ワークショップ（市域全域） 災害対応カードゲーム教材「クロスロード」 ※被災地ボランティアの概要説明も実施。	
7 月 18 日（金）～ 20 日（日）	ワークショップ（市域全体） 「東日本大震災被災地ボランティア活動体験」 ※18 日夜発～19 日「ボランティア活動」～20 日到着 ※活動場所は宮城県七ヶ浜町	RSY 栗田および 高木、RSY セツ 浜町現地スタッフ等
8 月 1 日（金） 19:00～20:30	ワークショップ（モデル地区） ※「避難所開設訓練」の役割分担や当日の行動手順等について協議します。	
9 月 2 日（火） 19:00～20:30	ワークショップ（モデル地区） ※「避難所開設訓練」の役割分担や当日の行動手順等について協議します（最終確認）。	RSY 栗田および WS ファシリテーター5 名程度
9 月 7 日（日） 10:00～11:30	ワークショップ（モデル地区） ※高浜市総合防災訓練にあわせ、モデル地区で「避難所開設訓練」を実践します。	
12 月 10 日（水） 19:00～20:30	ワークショップ（モデル地区） ※「避難所開設訓練」の振り返り	
2 月 7 日（土） 14:00～16:00	成果報告会 ※モデル地区活動の振り返りと今後の課題を盛り込んだ 1 年間の取り組みの報告会を開催します。 防災講演会（きずこう会と市民対象）	長野県白馬村 津滝俊幸氏 太田史彦氏 ほか

1. キックオフ講演会とワークショップ「避難所運営ゲーム HUG の体験」

- 日時：6月7日（土）14:00～16:30
- 場所：高浜市役所 4階第2会議室

□キックオフ講演会「避難・避難所の課題」

講師：RSY 栗田暢之

RSY が東日本大震災の被災地、宮城県七ヶ浜町の被災者に当時の状況や行動等をヒアリングして発刊した『被災者が一番伝えたいこと』をテキストに講演を行った。

まず、避難行動について、今までに体験したことのない大きくかつ長い揺れに翻弄しつつも、津波の到来を予測していち早く避難した方の「少しでも高いところへ」、ダウン症の娘に、普段から繰り返し避難経路を教え、当時自宅で一人にいたにもかかわらず、訓練通りに無事避難したその子の母親の「家族での避難訓練への参加が避難行動に活かされた」、過去の津波で高台から階下の人たちにこっちに逃げろと伝えたことから「招又（まねきまた）」という地名がつき、今回もその高台へ逃げて難を逃れた方の「言い伝え、口伝、前人が残したものをおろそかにしてはならない」、幼稚園が津波に襲われるも園児や教員全員は裏山へ全員無事避難し、その場で一晩を明かした時には、食事やトイレ、寒さ対策などを弱者優先で対応した幼稚園副園長の「限られた中で工夫し助け合い、励ましあうことが大事」、地域住民を一時避難所からさらに高台に誘導し、避難所リーダーを決め、また町役場との情報のパイプ役になった町会議員の「臨機応変な対応を」などを紹介した。

避難所・避難生活について、班分けやリーダー決めなどの組織化を即座に成し遂げ、避難所となった学校にも協力を仰いで、不安と不満の解消に尽力した町職員の「避難所運営は「地域力」に勝るものはなし」、アトピー患者に対するアレルギー除去食の提供やトイレを清潔に保つ様々な工夫、そして高齢者などに対する毎日の声掛け等を精力的に実践した老人福祉センター職員の「家族、ご近所、運営スタッフによる見守りの多重構造が重要」、約 400 名の避難所で、災害時要援護者に対する優先的な配慮をしつつ、部屋ごとのリーダーを配置して救援物資等は少しずつでも全員が行き渡るように努めた避難施設の事務局長の「毎日の部屋長会議が住民の主体性と合意形成を支えた」などを紹介した。

いずれも、巨大地震を控える高浜市民にとっては参考になる話ばかりで、実際に体験した方々の生の声は、大いに参考となった。

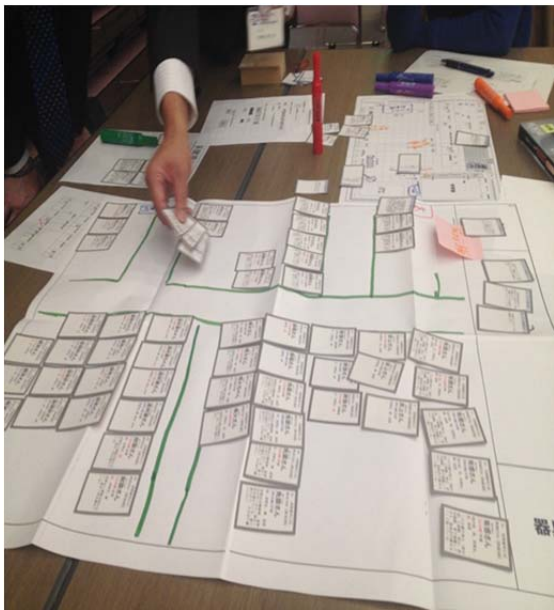
□ワークショップ「避難所運営ゲーム HUG の体験」

進行：RSY 高木雅成

HUG は、H (hinanzyo 避難所)、U (unei 運営)、G (game ゲーム) の頭文字を取ったもので、英語で「抱きしめる」という意味。静岡県職員らが避難所運営のノウハウを学ぶために開発した。一般的な学校が地震によって避難所となって開設されたことを想定。机の上に学校平面図を配置し、5人1組になって、早速体験した。以下は参加者の感想や意見。

- ・ できるだけ町内会単位で区割りをして、隣近所の顔の見える関係の方々が入っていただくようにしたい。
- ・ 避難スペースは原則として体育館となっているが、病人やけが人、また乳児や障害者など要援護者などは教室の空きスペースを利用しなければならない場合がある。

- ・ 車いすの方や足の不自由な高齢者のために、段差はできるだけなくさなければならない。
- ・ 仮設トイレは人がたくさん出入りする場所からは少し話した方がいい。一方で、夜間の使用を考えると、灯りを照らすなど防犯対策が必要。
- ・ 地域以外の避難者であっても受け入れを拒否できないことを知っておくべき。
- ・ バスでの外国人観光客は、避難所の中に入っていただくほか、スペースに難があるようなら、とりあえずバス車内で待機していただく方法もある。
- ・ グラウンドの駐車場は、最初から係が指示して整然と並べないと、後々面倒なことになる。
- ・ 喫煙は、敷地外の道路等に専用スペースを設けることが必要。
- ・ ペットは原則として、人間の居住スペースには入れないことにしたい。ただし、屋外のピロティなど、雨風が当たらない場所を選びたい。
- ・ 行政担当者との密な連絡体制を確立すべき。
- ・ マスコミ対応は本部で一括するなど、勝手にカメラが入ってこないようにしなければならない。
- ・ 住民がお客様にならず、どう積極的に運営に関わってもらうかが肝心だ。



2. ワークショップ「災害対応カードゲーム教材・クロスロードの体験」

- 日時：6月30日（月）19:00～20:30
- 場所：高浜市役所4階第2会議室

□ワークショップ「避難所運営ゲーム HUG の体験」

進行：RSY 高木雅成

クロスロードとは、分岐点、分かれ道という意味。緊急時に求められる様々な「正解のない」対応を、自分だったらどうするかを「イエス・ノー」で意思表示します。阪神・淡路大震災での

神戸市職員等の実体験を基に、災害時の対応を考えるために大学教授らが考案した防災教材。5人1組になって、早速体験した。以下は今回のお題。

- 寒さ厳しい真冬の夜中。大きな揺れがあり、避難所である小学校には、続々と避難者が集まってきている。しかし、夜中ということもあり、施錠され、鍵も見当たらない。避難者からは、「早く入れろ！何で入れないんだ！」と、怒り交じりの声が上がっている。鍵（窓）を壊して室内に入れるようにする？鍵が来るまで待つ？
- 避難所に続々と人が集まってきており、体育館から溢れそうな勢いです。現在の避難者の多くは、体力や元気のある人・近所の人であり、すでに場所取りを始めています。遠方からの避難者や足腰の弱い高齢者も今後続々と避難してくると思われれます。後から来る避難者のスペースを確保する？確保しない？
- 避難者から喫煙所を作ってほしいと要望があった。学校に相談すると、敷地内は教育の場であるからダメだと言う。学校を一步出た周囲には吸殻がたくさん落ちており、隠れて吸う避難者もいる。小学校の中に、喫煙所を設置する？今まで通り禁煙とする？
- 支援物資を分けてくれないかと、学区内のあるアパートの大家が訪ねてきた。アパートには一人暮らしの若者が8世帯住んでおり、家屋は無事だがライフラインの途絶により、在宅避難者となっている。食糧などの備えもしておらず、何とかしてほしいと言われ避難所へお願いに来た。物資をわける？避難所外の人にはわけない？
- 現在避難所には、500人の避難者が生活しています。その避難所へ、おにぎりが300個届きました。全体に配布するには200個足りません。数は足りないが、もったいないので配布する？平等に配布できないと苦情が出る可能性もあるため、配布しない？
- 既存のトイレが使用できない中、避難所に仮設トイレが8基到着した。男女平等に4基ずつ、男性専用・女性専用と振り分けて使用を始めた。数日後、女性専用の4基に長蛇の列ができていた。男性専用側にも列はできているが、待ち時間は女性専用の半分以下である。トイレの再振り分けをする？男性側も待っているのものでそのままにする？
- おばあさんが、座敷犬と一緒に避難所へやってきた。この避難所のルールとして、ペットは室内に入れられないと伝えるが、おばあさんは、他に身寄りもなく、その犬が唯一の家族なのだと言う。どうしても一緒に生活させてほしいと、涙ながらにお願いされた。ルールを守り入れさせない？特例を認めおばあさんに許可を出す？

お題はすべて実話に基づいた内容であり、また全員が一致した答えがあるものではないため、各グループとも、なぜイエスなのか、ノーなのかについて、白熱した議論となった。実際の災害現場では、このような場面が四六時中発生することから、避難所運営は行政任せではなく、住民側のリーダーの存在の大きさや、避難者間の合意形成の大切さを学んだ。

3. ワークショップ「東日本大震災被災地ボランティア活動体験」

- 日時：7月18日（金）～20日（日）
- 場所：宮城県七ヶ浜町

□目的

東日本大震災で津波被害を受けた宮城県七ヶ浜町を訪れ、震災から3年が過ぎた被災地の現状を知ると共に、ボランティア活動を通して地域住民との交流を行い、防災・減災対策への認識を深める。また、東海地域で今後発生が危惧される「南海トラフ巨大地震」に対し、「自助」「共助」「公助」を基本としたいのちを守る取組みを実践していけるよう、被災地でのボランティア活動を体験する。

□行程

日時		内容	場所
18日(金)	20:00	高浜市発	高浜市民センター
19日(土)	7:30	七ヶ浜町着	生涯学習センター前
	8:00	オリエンテーション	バス車内
	8:15	町内・沿岸部視察	菖蒲田浜海岸など
	9:00	炊出し準備・調理開始	七中仮設住宅集会所
	11:00	炊出し配膳・昼食交流会	
	13:00	炊出し片づけ	
	14:30	被災者から教訓を学ぶ交流会 語り手/岩本喜治さん・渡邊洋子さん	中央公民館(和室)
	16:00	片づけ	
17:00	七ヶ浜町発	生涯学習センター前	
20日(日)	7:00	高浜市着	高浜市民センター

□当日の概要

東日本大震災で町面積の1/3が津波による浸水被害に遭うなど、甚大な被害のあった宮城県七ヶ浜町を訪問した。町に到着後、防潮堤などの復旧工事が進められている現場を視察し、その被害の甚大さを改めて目の当たりにした。その後、今回の主目的である七ヶ浜中学校グラウンドに設置されている仮設住宅での炊き出しの準備に取り掛かった。あいにく時より雨が降る天候になったが、高浜名物「とりめし」の準備や余興の足湯の準備、入居者への案内チラシを配布するなどした。仮設住宅では、久しぶりの炊き出しに、様子を見に来たお年寄りや子どもたちとの会話も楽しみながら行うことができた。予定の11:00には完成し、それと同時に食堂としてお借りした集会所には、続々と被災者が集まり、早速



食していただいた。配膳係以外の参加者にはできるだけ一緒に食べていただくようにして、被災者からの生の声に耳を傾けた。

炊き出し終了は、お借りした場所をきれいに原状に復し、場所をセヶ浜町生涯学習センターに移して、被災者の岩本さん・渡邊さんから当時の状況の話をお聞きした。迅速な避難判断と要援護者への配慮等の必要性のほか、平常時からの地域コミュニティの大切さについては、特にお二人の一致した教訓であった。



参加者からは、「震災から3年以上経てもなお課題山積の現状に言葉を失った」「とりめしがおいしいと言っていたら、こちらが感激した」「また機会があれば訪れたい」などの感想があった。

4. ワークショップ「避難所開設訓練」の役割分担や当日の行動手順等について

- 日時：8月1日（金）19:00～20:30
- 場所：高浜市役所4階第5会議室

2014年9月7日に開催される「避難所開設訓練（高浜市モデル防災訓練）」の実施計画についての説明があり、それに基づく役割分担や当日の行動手順等について、各町内会で協議を行った。また、今回のモデル地区となった吉浜まちづくり協議会防災対策グループリーダー・石原氏から、これまでの進捗についての解説があった。

□配付資料

- ・ 避難所開設訓練に伴う役割分担等について
- ・ 避難所開設訓練の実施計画
- ・ 伝言／平成26年度「避難所開設訓練用」シート
- ・ 避難所開設チェックリスト
- ・ 避難所施設の利用計画（開放スペース）
- ・ 避難所施設被災状況チェックシート
- ・ 避難所収容者名簿
- ・ 避難者（帰宅困難者・テント生活者・車生活者）名簿
- ・ 避難所運営組織表
- ・ 各部の業務一覧（総務部・管理部・情報広報部・施設部・食料物資部・医療衛生部・ボランティア部）
- ・ 避難所開設訓練タイムスケジュール
- ・ 避難所開設訓練会場レイアウト

5. ワークショップ「避難所開設訓練」の役割分担や当日の行動手順等について（最終確認）

- 日時：9月2日（火）19:00～20:30
- 場所：高浜市役所

避難所開設訓練に向けて、前回協議した役割について、この間各町内会で詰めてきた内容と当日のスケジュールについての最終確認を行った。また、市から、9:30～9:55の間に愛知県の防災ヘリコプターが高浜市の上空を飛ぶという計画の報告があった。

また、8月19日に発生した広島市土砂災害への支援活動から感じた現場の報告をRSY・栗田が行った。以下はその概要。

災害から10日余りが経過し、被災者の疲労はピークに達している。避難所となった梅林小学校では、パンや弁当の類が配給されているが、そろそろ作り立ての暖かい食事がしたいとの声も聞かれる。支援団体が炊き出しの提案をするも、構内での生火は禁止とすることで、実現できていない。こんな時でもダメなのかと少々呆れている。また昼間は、仕事や学校、自宅の片づけなどで若い人はほとんどおらず、高齢者ばかりが残されている。寝転がるにも体育館の床は固く、腰を痛めた人が多いことから、段ボール会社の協力で「段ボールベッド」が並べられ、ほんの少しだが厳しい避難所生活の緩和となっている。なお、今回のマスコミ報道はずいぶん加熱気味で、まるで広島全体が土砂に埋まった勢いである。この件は広島市長も問題視しており、今後の災害時におけるマスコミ対策も考えておかなければならない。

□配付資料

- ・ 避難所開設訓練タイムスケジュール
- ・ まちづくり協議会、町内会の市総合防災訓練二次訓練予定
- ・ 土砂災害警戒情報の緊急速報メール配信エリアを拡大します（愛知県河川課からのチラシ）

6. 高浜市総合防災訓練にあわせた「避難所開設訓練」

- 9月7日（日）10:00～11:30（準備・後片付けに前後1時間程度）
- 吉浜小学校

□目的

1. 大規模災害発生時における、被災者の一時的な居場所となる「避難所開設」の訓練を行う。
2. 訓練を通して避難所開設のノウハウを習得する
3. 避難所開設に必要な備品とマニュアルの様式の考察を行う

□当日の概要

時節柄、暑い日ではあったが天候には恵まれ、各町内から続々と避難者が集まって避難所の開設を並んで待った。体育館では、すでに役員や学校教諭らが開設マニュアルに従って、着実に開設に向けた準備を行った。10:00に避難所を点検後、いよいよ開設、それぞれの町内会の区分ごとに入ってもらった。負傷者の救護所、要援護者のスペースなども設置された。また断水を想定して、学校プールからポンプで簡易貯水槽に汲む訓練も消防団によって実施され、避難者はその水

を使ってトイレを使用した。一方、実際の災害現場では避難所運営が順風満帆に行くはずもなく、大声で苦情を訴える者、隣の迷惑も考えずに大音量で音楽を聴く者などを想定した「ハプニング対応」を行ったが、参加者にとってみれば何が実施されたかわからず、少々企画倒れとなった。それでも、訓練の様子を総合司会者が案内するなどの工夫も凝らし、一定の成果はあった。

今回の訓練は、町内会の運営者側が一連の流れをマニュアル通りに一度動かしてみようという目的の訓練だったので、避難者名簿などの書式を実際に使用して避難者数の総計を出したり、本部や市への相談・伝達等を実際に試したりすることができたので、この体験は大変参考になったといえる。



7. ワークショップ「避難所開設訓練」の振り返りについて

- 日時：12月10日（水）19:00～20:30
- 場所：高浜市役所4階第5会議室

諸般の事情で時期的に少し間が空いたが、避難所開設訓練の振り返りを行った。また、まち協を代表して石橋氏からは、「事前準備は大変だったが、運営者の訓練としてはとても参考になった。」

不十分な点もいろいろ見えてきたので、以降の訓練に生かしていきたい」との挨拶があった。以下は主な感想や意見。

- ・ 一通りマニュアルに沿って実践できた。
- ・ 住民の1割が参加したので、まずまずか。
- ・ もう少し運営者側にマニュアルの説明をしておくべきだった。
- ・ 町内会・まち協・企業との連携があまりできなかった。
- ・ 訓練参加の人数集めに奔走した（いつも同じ人しか集まらない）。
- ・ やっぱり避難者が退屈していたので、もっと役割を与えるべきだった。

また、11月22日に発生した長野県神城断層地震の支援活動から感じた現場の報告をRSY・栗田が行った。以下はその概要。

特に白馬村堀の内地区壊滅的な被害となったが、は何と言っても死者が出なかったのは奇跡的。その裏には、地域住民同士の迅速な救助活動があり、また婦人会による炊き出し、町内会有志による自警団による警備など、そもそも地域コミュニティ力がすぐれていたことが特筆に値する。現在は専門家とボランティアの協働による家財等の搬出やまもなく訪れる本格的な降雪に備えた家屋の応急的な補強や雪対策などが懸命に進められている。一方、村の貴重な財源にもなっているスキー客への風評被害などが早くも出始めている。

8. 成果報告会

- 日時：平成27（2015）年2月7日（土）14:00～16:00
- 場所：高浜市市民センター（高浜市中央公民館）3階会議室
- 次第

時間	内容	担当等
14:00～14:10 (10分)	開会の挨拶	高浜市・神谷坂敏副市長
14:10～14:30 (20分)	1年の取り組みの報告 ※DVDを使用して1年の諸活動を振り返る。	高浜市 都市政策部都市防災グループ
14:30～14:50 (20分)	避難所運営訓練の報告	吉浜まちづくり協議会 防災グループリーダー 石橋勝治氏
14:50～15:00	休憩	
15:00～15:50 質疑応答含む (50分)	対談 「その時、どう助け合ったか～11月22日長野県 神城断層地震被災者の証言」	長野県白馬村 津滝俊幸氏（白馬村議員） 太田史彦氏（三日市場区長） 聞き手・RSY 栗田暢之
15:50	閉会の挨拶	高浜市・吉岡初浩市長

総合司会：松山文紀（RSY）

□当日の概要

神谷坂敏副市長による開会のあいさつの後、高浜市都市防災グループ・萩原氏による1年の取り組みの報告があった。特にクロスロードの報告では、非常持ち出し袋の扱いについて実際に来場者に問うなどの工夫もあった。

次に、吉浜まちづくり協議会防災グループリーダー石橋勝治氏による避難所開設訓練の報告があった。今年で3回目の訓練で、本来は運営訓練が必要だが、まずは立ち上げることに取り組んだ。市のマニュアルができ、小学校、中学校でもマニュアルができたので、その検証も踏まえて取り組んだ。ねらいは、災害時には迅速に避難所が開設できるように。そのための備蓄品の確認（ブルーシート、照明器具、トイレトペーパー）やトイレの水はプールから汲んだ。受付は体育館の中に入って町内ごとに実施した。学校の先生も18名参加してくれ、小学校のマニュアルとの照らし合わせもできた。設営時、参加者を外で待たせてしまい、設営の様子を見てもらえなかった、などの反省もあったが、訓練前に町内会の方と幾度も話し合いをした。一方で、訓練対象地域（吉浜）以外の地区や企業の方が活動に参加する内容を盛り込めばよかった。全体的には訓練の経過について校内放送を使ったこともあり、参加者の意識高揚につながった。

続いて、基調報告として、長野県神城断層地震で被災された津滝俊幸氏（白馬村村議会議員）、太田史彦氏（三日市場区長）をゲストに迎え、RSY栗田が聞き手となって対談を行った。

津滝：紹介いただいた通り、議員をさせていただいています。今回、全国のみなさんから義援金やふるさと納税などのお見舞いを頂戴しております。テレビでの報道の通りの被害があったが、皆さんに復興に向けた頑張りを伝えていきたい。今、積雪が2m。35戸が仮設住宅に入居。その他は公営住宅、住宅修繕で再入居など。雪解け後に本格的な復興に向かうところ。

栗田：津滝さんは、地震発生時東京に居たそうですが、どうやって戻ったんでしょうか。

津滝：東京でセミナーを受けていた時に自宅より地震発生の連絡を受けた。「家の戸が外れた」という報告で、それくらいはあるだろう、と思っていた。父は86歳、大丈夫だった。近所の安否が心配だったので、家族に確認依頼をした。幸いにも、電話がつながっていた。外からの電話もかなりあったはずだが、オリンピックをやった土地だったこともあり、通信インフラが整っていた。村内の連絡も電話が通じたため、情報がやりとりできた。携帯で連絡がとれたことが何よりよかった。たまたま東京には車でいたので、戻ることができた。震源は長野県北部、長野市と白馬村との間。通る道路を選んだ。車のテレビ音声を聞きながら走っていた。NHKの報道もライブ放送だったので、通る道も選べた（想定がついた）。午後10時8分に地震が家に着いたのが午前2時。高速道路の渋滞はなかった。

（以下は11月23日朝の現地画像を映写しながら解説）

薪ストーブ用の薪がばらまかれた。築80年のためリフォームもしたが、全壊した。サイディング加工したところは大丈夫だったが、土塀はほぼすべて崩れた。墓は中が見えるほどの被害。玄関の戸が外れたのを妻が電話で報告していた。明るくなってから見ると、外壁など、相当の被害があった。土壁は揺れを吸収して崩れてくれるようだが、本当にほぼ全て崩れた。縦揺れと横揺れが立て続けに起こってガラスでのケガ人が何人かいた。車のタイヤがホイールから外れるほどの横揺れがあったと思われる。地面に幅50cmくらいのクラックが入った。建物もベタ基礎から1m

ほどズレた。夜の地震で停電。真っ暗な中で飛ばされた感じ。夜 10 時の地震だったので、年寄りには寝る前、入浴中も多々、トイレからは出られない人もいた。裏山はクラックが入り、雪がしみこむと崩れると思う。翌日から、建物の応急危険度判定が始まったが、自宅は赤紙（危険）で入れなくなった。もう一軒あった家（築 10 年くらい）は緑紙だった（調査済：大丈夫）。活断層の地震だったが、建物倒壊は極端に局所的。堀之内と三日市場だけが被害。耐震診断は絶対必要。農業用のプラントでは灯油の管が破損し、漏れてしまった。鉄の柱も曲がるほどの揺れ。田んぼも隆起した。だいたい 70cm くらい動いた。農地の災害査定は数日前に入ったところ。農地でも液状化現象があった。断層の地割れは大きいところでは 1m ほど。

太田：三日市場は三日月状に広がる地域。10 時まで仕事をしていた。庭を歩きながら一服していたら、聞いたことのないゴッゴーっという音の後に浮き上がった。電柱のトランスから火花がでて停電。揺れは一方方向ではなく、2~3 分ローリングするように揺れていた。直後より、防災無線が鳴りはじめて、地震発生を告げていた。10 時過ぎということで、火を使っていない時間帯だった。タバコの火の始末をどうしたかは覚えていない。

栗田：高浜市は震度 7 の被害想定が出ている。お二人の地域も震度 6 弱程度ではない。

太田：ローリングするほど、地鳴りがするほど、低いポーっと（飛行機が飛ぶような）音がした直後に揺れた。

栗田：自分は岐阜に居たが緊急地震速報が鳴ったが、白馬村は？

太田：震源に近かったからほぼ同時だったと思う。

栗田：家に戻った後、どうした？

太田：母と妻が母屋に、事務所が別棟。事務所 3 階に次男がいた。帰った時には次男が屋外でスマホを使って情報収集していた。車庫から車がなかなか出せなかった。車のライトで母屋を照らした。住宅は一部損壊、事務所は無傷。たまたまだが。堀之内と三日市場は近いが被害が違う。120 世帯あるが、80 対 40 で堀之内に被害が集中した。家族にケガ人なし。

栗田：津滝さん自身の村議という立場、地域の中でやらなくてはならないことがあったと思うが死者 0 は奇跡なんじゃないかと思うが、そのあたりの解説をいただきたい。

津滝：確かに奇跡と言えば奇跡。時間が 1 時間遅かったら、寝静まっていてつぶされただろうし反応が遅かったら。1 時間早かったら、家族団欒の時間帯。どこかしらで火が出た可能性が高い。実際は火災発生 0。移動しながらの連絡がとれたことが助かった。役場、家族、仲間内など。村が災対を 12 分後に開設。2 時に戻った時、役場の職員はほぼ全員出動していた。倒壊家屋の中に閉じ込められた人も居たが、コタツの下やベッドの下、机の下に逃げて空間が確保できてつぶされなかった、と聞いている。学校教育の成果かと。同じ名字の津滝さん（老婆）が生き埋め。旦那は別宅で寝ていた。「家族が埋まっている」と声を掛けて、どこに寝ているかが分かって助けられる状況になった。誰が安否確認できてない。外に出る時はスリッパを履いていた。救急車は誰も呼ばず、住民同士で運ぶことができた。トラクターでやったが上がらない。ジャッキでようやく上がって救出できた。隣同士が助け合って救出ができた。近所同士の付き合いが功を奏

した。電話がつながったので、住民が避難している場所も特定できて、村から車を出すことができた。消防局の職員も新潟に出張中で不在も電話が通じて対応できた。レスキュー隊の世話になった人もいたが、死者はいなかった。

栗田：地域で「どこに誰が居る」ということを知っている地域とはいえ、すごいこと。

津滝：公民館が避難所だったが、耐震診断をしたら全くダメだった。ダメだから、別の場所を候補地にするなどの話が事前にできていた。本当にその候補地に皆が避難した。たまたま去年8月に地縁団体に認定されて名簿作成をされていて人員構成が把握できていた。その名簿があったので、組長経由で安否確認ができて、行方不明の人がいなかった。その後、避難所に移動した。名簿も効果があった。

栗田：東日本大震災や栄村の地震の影響がいい意味であった、と。公民館を直せ、ということよりも候補地に逃げた。もともとの防災意識が高いことと、地域性があったことと、道具もあったことなども要因か。

津滝：地区の防災関係者が若い年代が多かった。40代も居る。人は減っているが、たまたま若い年代が多い時に地震が起こった。

栗田：日本全国40代の防災役員はほぼいない。学ぶところは多い。

津滝：村社会はいいところも悪いところもある。たまたま今回はいいところがでた。

栗田：死者0の理由がそこにあると思う。太田さんは区長としてどう動いた？

太田：堀之内は外に出た、ということだったが、三日市場はほとんどの人は家に戻った。独居高齢者に声をかけていくと、地区の中央部に行くほど被害が大きくなった。灯油のにおいがしたのでおかしいと思ったら、タンクが倒れていた。火事の危険性を考えた。声をかけている時に自分自身が何かがあってばマズイ、と思い、2人で回った。灯油のコックを閉め、プロパンの元栓も閉めた。ブレーカーも切った。この3つをしながら回った。特別訓練はしていない。35軒+5軒と110名くらいの安否を、民生委員と一緒にした。自主防は区の役員と同じ。自分よりも若い世帯主は4人。区長は2回目。村としても全体の防災訓練をやっている時に、地区のイベント後に消火訓練や支え合いマップの確認をした。

栗田：地域のリーダーの存在も大きいと思った。被災者の現在の様子はどうか。新聞記事などの情報もあるが、どうだろうか。観光客減などの話もあるが。

津滝：長野県知事などが視察し、仮設住宅の建設も早かった。仮設は35世帯。仮設に入るためには全壊・半壊の罹災証明が必要。仮設以外には、公営住宅（一年の入居期限）、一部損壊などは修繕で入居している。村外に出た人も3分の1くらいいる。親戚や家族のところに避難した人もいる。全体としてバラバラになっている。今年は特に雪が多い。一晩に50cmつものこともある。雪下ろしができない家屋で潰れてしまったお宅もある。災害で亡くなった方はいなかったが、その後5名が死亡。80歳以上。関連死になるかどうかは村が協議中。避難生活が子どもよりも高齢者に影響がでた様子。一次避難はプライベートなし。二次避難は宿泊施設も自宅とは勝手が違い、影響があった。持病の悪化もあっただろうが、急に悪くなった印象が強い。自分も血圧が高くは

ないが上がってしまっているようだった。そういうことから、高齢者へのプレッシャーが大きかったと思う。本格的な葬式は雪解け後。例年であれば4月上旬には雪解けになるが、今年は遅くなるかも。残雪対策も今回は必要。3月議会で話しになると思う。除雪は2億円くらい毎年使うが、今期は12月で使い切ってしまった。その上の震災。住民はそれぞれに避難生活をしているが、雪解けを待って対応になると思う。議会でも災害復興委員会を立ち上げて復興話し合いを始めたところ。局地的激甚災害指定も受けた。田んぼ、インフラの整備が優先かと。家の解体も雪解け後。解体しないと次に建てられるかが分からない。ガレキの処理も村としては課題。半壊以上は村負担で対応。山間地で地割れなどもあるので、今後集団移転の可能性もあるかも。しかし、高齢者にとって新たに家を建てるのは困難。復興公営住宅の建設も視野に入れているが、いずれにしてもお金がかかる。基幹産業の雪関係には外国人が年間8万人ほど観光で来る。海外の客は減っていないが、国内の人のキャンセルが多い。例年の2割減。是非スキーに来ていただいて白馬を支援してほしい。

太田：今は積雪で何もできず我慢しているところ。雪解け後に落ち込むと思う。是非、皆さんの支援をいただきたいと思います。

栗田：当方スタッフの松山が先遣で入った。赤紙は対応できないが、黄紙は何とかしたいので、経験のあるボランティアで対応してきた。雪で崩れる前の対策をさせていただいた。スキーに限らず交流会も予定している。是非高浜市からも参加いただきたい。3月には子どもたちを愛知に招待して楽しんでもらうツアーを企画している。そんな企画にも参加してほしい。最後に一言ずつアドバイスをいただきたい。

太田：村社会でないところで、横のつながりを強くするのは難しい。緩いつながり、がいい。普段は緩く、緊急時にはガッチリつながれる、緩いつながりがいい。

津滝：自分の身は自分で守る。自分の次は家族、その次はご近所。それを広げる。常日頃の地域のイベントに参加してもらってお互いの顔を知ること。それが横のつながりを生む。



最後に吉岡市長より、「皆に参考になったと思う。お二人には遠くからお越しいただき感謝したい。昨日、市では福祉避難所の協定を締結した。日頃の訓練も踏まえて時間をかけた。実際の時に、本当に生きるよう、より互いに助け合える地域づくりに今後も尽力したい。」と挨拶があり、閉会とした。